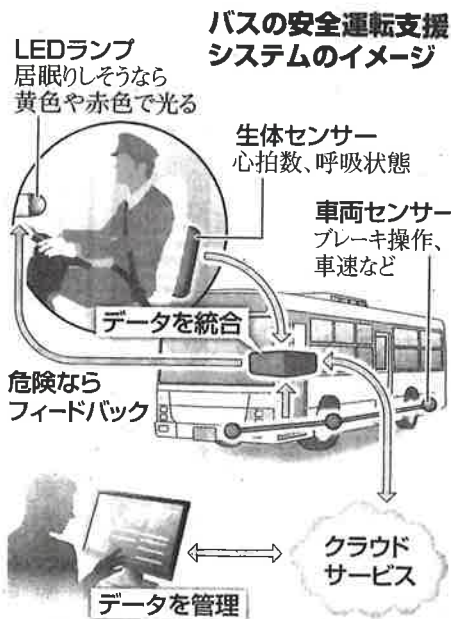


## 居眠り運転 防止へ新手法

運転手の健康状態と車両情報を計測し、居眠りしそうなになったら警告を出す仕組みを、大阪電気通信大や京都産業大などのグループが開発した。「みなと観光バス」(神戸市)の神戸市内を走る路線バスで、実証実験を進めている。

運転手の居眠りや注意力散漫による重大事故は社会問題になった。眠気や注意力の状態をつかむため、研究グループは運転席の背もたれに薄い生体センサーを設置。体に触れずに、マイク口波で運転手の呼吸状態と心拍数を測れるようにした。腕時計型や耳たぶにつける肌に接触するセンサーより、運転手に違和感を与えずに済むという。



## 神戸の路線バス 実証実験

が基準値以下になると、居眠りなどの恐れが高まったとして、レベルに応じて運転席のLEDランプが黄色や赤色に光り、注意する。

また、生体センサーの情報と、車両位置、車速、ブレーキ操作などの情報、道路の車線数、過去の運転状況などの情報をネットワーク上で統合。事故リスクの高い地点を洗い出せる。高速道路と市街地で運転手の心拍数が違うといい、注意を促す基準値を道路ごとに探ることもできる。

路線バス30台にセンサーを搭載して来月までデータを集める。バス会社の事業所で運転手の状況を把握することも技術的には可能だ。みなと観光バスの担当者には「観光バスなどの長距離運行の際、運転手の異常が分かれば乗務の交代を指示できる。いずれは急な病気で自動ブレーキがかかるような仕組みにつなげていきたい」。大阪電気通信大の上善恒雄教授(情報工学)は「ビッグデータとして蓄積し、この仕組みを広く利用できる準備をしたい」と話す。

(後藤一也)